

バルからはじまるまちづくり

～一専業主婦がまちにハマった理由～

伊丹都市開発株式会社

参与 村上 有紀子

2004年に初開催された飲み歩きイベントの「函館バル街」、そしてその函館バル街を模して2009年に関西で初開催された「伊丹まちなかバル」。瞬く間に近畿各地に拡散していったバル事業の成功と共に変化していったまちの様子を、バルをきっかけに伊丹のまちづくりに参画していった「私」の視点を通して語りたいと思います。

1. 伊丹市について

伊丹市は、北は川西市、北西は宝塚市、西宮市、南西は尼崎市、東は池田市、豊中市と隣接、ブランド力のある周辺都市に囲まれながらも近年、活気あるまちとして注目をあびています。面積 25.09 km²の中に 196,942 人(平成 28 年 11 月 1 日現在)が住んでいるという兵庫県下でも尼崎市に次いで二番目に人口密度の高いまちです。摂津のへソと言わ



郷町長屋

れた伊丹は、古くからの城下町で清酒発祥の地としても名高く、江戸時代に酒造業が大いに栄え、その経済力から多くの文人墨客が訪れ、俳諧文化が華開いた、そんな歴史と文化の薫りが残っています。近年では、阪神淡路大震災後、民間で酒蔵を生かした地ビールレストランを建てたり、倒壊した阪急伊丹駅ビルを新しい商業施設にしたりするなど、震災をきっかけに街並みを整備し、蔵を再生し、一帯に郷町長屋という町家風の建築物を作りました。2008 年度には中心市街地活性化



酒蔵通り



三軒寺前広場

基本計画を立て、国の認定を受け、同年、国土交通省の都市景観大賞美しいまちなみ優秀賞を受賞、第2期の基本計画が認定された2016年には中心市街地の中心部分である三軒寺前広場がまちなか広場賞の優秀賞に、そして同じく中心市街地に新設して4年目を迎える伊丹市立図書館ことば蔵がライブラリーオブザイヤー大賞受賞と、内外の評価も高まっています。また、市内には野鳥の楽園である昆陽池やそれに続く緑道もあり、賑わいと自然が魅力の伊丹市は、この人口減少時にあって、わずかながら増加を続けています。

2. まちに出るきっかけ

結婚して京都から伊丹に移り住んだ私は、まちの歴史にもイベントにも全く興味を持たずに日々暮らしていました。2009年に偶然、町のアートを巡るまちあるきに参加したのをきっかけに、まちづくりに関わる人たちと出会い、その楽しそうな様子に惹かれるまま、「鳴く虫と郷町」という秋のイベントで、コンサートの企画運営をしてみないかというお誘いを受けました。しかし、普通の専業主婦だった私には全てが初めての経験でした。企画の立て方、協賛の集め方、チラシの作成方法、チケットの販売方法等を、一から教えて頂きながら、主婦仲間にも手伝ってもらいつつ、実現していきました。急に毎日が刺激的になり、一つずつハードルをクリアしていくことの面白さに目覚め、コンサートが大盛況のうちに終了した後は、味わった事のないような充実感と同時に、ぽっかりと穴があいたような寂しい気持ちになりました。



鳴く虫と修武館

そんな時、今現在伊丹最大のイベントとなっている年2回の食べ歩き・飲み歩きイベント「伊丹まちなかバル」を開催するので、参加店集めを手伝って欲しいと声がかかり、二つ返事で引き受けたのでした。

3. バルイベントから広がる活動

バルイベントは5枚綴りのチケット1冊(1枚700円、1冊3,500円)を手中心市街地の100軒以上の店から5店舗を選んでハシゴ酒をするというイベントです。お店は独自の工夫を凝らした1品とドリンクを用意します。そんな聞くだけで面白そうなイベントを成功させたいという気持ちで、普段話すことのない店主にイベントの説明をし、口説き落としていくことの面白さを覚え、気付けば1週間で70軒も勧誘に回っていました。

しかし、1回目のバルは失敗に終わりました。そのリベンジとともに、頑張ろうという参加店の力になりたいと思い、2回目に向けて一市民の私に何かできることはないだろうかと考えました。そして、80人の市民が80軒(2回目は80店舗が参加)のお店に1分間インタビューし、それをユーチューブにアップロードするという企画を考え、実行しまし



伊丹まちなかバル

た。バルイベントを知らない人に宣伝するためには口コミの力が必要で、インタビューした人は10人には自分の体験を話すだろうから、それが80人なら800人には宣伝できる。そして、自分がインタビューしたお店には、友達とチケットを購入して友達と行くだろうから、合計で160冊は売れるだろうと考えました。そして、映像は拡散され、地域のサインージュや観光物産店でも流され、NHKの取材まで来て、宣伝に一役買うことができました。それを機会に、そのままずっと実行委員会としてバルに関わっています(現在15回開催)。

その後、アーケードのある商店街(伊丹中央サンロード商店街振興組合)にサインージュ(電子看板)9台が設置されたのですが、そこに流すコンテンツがないと相談を受けました。その頃にはなぜか「マダムM」というのが私の通り名になっていましたので、「マダム、何か考えてよ!」と言われました。「ないのなら、集めたらいいのではないか?」とまず一番に思い立ちました。映像コンテンツを全国から公募したら面白いと思いました。商店街を歩いていて、立ち止まって見る時間は3分間程度だろうから、3分間の映像を全国から集めたらよいのではないかと考えました。そして、せっかくなら商店街にレッドカーペットを敷いて授賞式をやれば盛り上がると思いました。「伊丹」「宝物」をテーマに募集した「伊丹まちなか映像祭」は、全国から100作品が集まり、商店街は大勢の人で溢れました。

また、そんな商店街の活動を通じて知り合った方から空き店舗を半年間無償提供され、そこで様々な市民活動を実験的に行いました。子育てサークル、折り紙教室、陶芸教室、伊丹の桜スポットの写真展、東日本大震災の写真展、講演、ニットカフェ(毛糸店の店主が編みものを教える教室)等を行い賑わいました。その活動の経験は2012年に開館した伊丹市立図書館ことば蔵の一階交流スペースの運営をお手伝いした時にとても役立ちました。

このような様々な取り組みを行ううちに、お声がかかり、伊丹市中心市街地活性化協議会のまちづくり推進団体NPO法人いたみタウンセンターに入会、2013年には理事長に就任し、伊丹の賑わいをつくるための様々な事業を皆で行いました。そして2016年、いたみタウンセンターはハード系の3セク会社の「伊丹都市開発株式会社」と事業統合し伊丹の新しいまちづくり会社となりました。

市民がまちづくりに参画することを求めているまちは全国各地にあります。私の経験に興味を持って下さった様々な都市からお声をかけて頂き、「市民がどのようにして、まちに参画していったのか?」、「バルイベントについて」、「お手伝いした図書館の話」など、様々なテーマで講演依頼を受けるようになりました。そんな風に、どんどんまちづくりにめり込み、いつしかそれが仕事になっていきました。

では、私がまちづくりに関わってきた8年程の間に、伊丹はどのように変化していったのでしょうか。

4. バルをきっかけに変わったまち

伊丹まちなかバルは、今では日本最大級のイベントに成長しています。「伊丹オトラクな1日」という音楽イベントが同日開催されることも賑わいの要因です。このバルイベントによってそれまで見知らぬライバル同士だった個店と個店が出会いました。月に一度、定期的に飲食店が集まる実行委員会の会議で、喧嘩するほど熱く議論したり、互いに認めあったり、励ましあったりするうちに、どんどん関係性が深くなっていきました。個店ひとつひとつの点が線になり、面になっていくように、店同士がつながってゆき、



伊丹オトラクな1日

そのうちに気の合う者同士で自分たちのイベントをしようと盛り上がりました。そしてバル開催の「春と秋」以外の「夏と冬」に広場に屋台を組み、食と音楽を楽しむイベント「伊丹郷町屋台村」を開催しました。そして次の世代である昭和57年生まれของกลุ่ม「五七会」が、新たなイベントを行い、それを先輩である伊丹郷町屋台村の店主達がサポートしました。その連鎖は続き、音楽フェスを開催したその下の世代の若者を五七会がサポートするなど、素晴らしい連鎖が続いています。飲食店が他地域から注目を集めるようになったことで物販店も刺激を受け、物販イベントとして「伊丹クリスマスマーケット」を開催、また、月に一度の「イタミ朝マルシェ」も始まりました。このように賑わっている伊丹に地元企業から声がかかり、企業と商店がコラボレーションするイベントとして伊丹イースターまつりも行われています。他にも、地元の大学生が実行委員となって年2回開催されるイベント「いたみわっしょい」。地酒を楽しむ「酒樽夜市」、アートマルシェ、コンサートが次々に開催されており、伊丹はいつ行っても何かイベントをして賑わっているといわれるまちなりました。



伊丹クリスマスマーケット



イタミ朝マルシェ



いたみわっしょい



伊丹郷町屋台村

なぜこのように賑わいが継続するまちなったのかを考えると、以下の5点が考えられます。

①「様々なイベントでお互いに助け合う気風のあること。」

イベントを立ち上げる人が多くなったことで、その苦勞のわかる人が増え、それによって、新しいイベントが行われる時には、先輩がそれを影で支える場面がよく見受けられる。

②「イベントをサポートする機関があること。」

中心市街地の活性化を推進するためのまちづくり会社「伊丹都市開発株式会社」が道路使用許可申請等のイベント実施のノウハウ提供や、テントや机、椅子、発電機など様々な備品の貸し出し等を無料でやっていること。

③ 「イベント広場が活用しやすいこと。」

中心市街地の真ん中に電気と水道の設備のある広場が整備されていて、申請すれば利用できる。伊丹市は市長自ら「市民力」を大切にしていると公言しているだけあって、様々な面で役所のサポートがある。

④ 「イベントをサポートする市民(町衆)が育っていること」

イベント開催までに SNS で情報を拡散したり、イベント当日には現場を手伝ったりと、支えている市民(町衆)の存在は大きい。そしてサポートする側も経験豊富になり、色々な面で支えることのできるスタッフが育っていきました。そしてスタッフをしていた人が、やがて主催者になるということも増えてきました。

⑤ 「イベント実施のハードルが低くなってきたこと」

多くの人が大小様々にそれぞれの身の丈にあったイベントを行うため、イベント実施のハードルは低くなっている。

以上のような賑わいの継続によって生じた「外的変化」と「内的変化」について考えてみましょう。

「バル後のまちの外的変化」

外からの賞賛や評価など、組織や国や仲間から与えられるものは「外的評価」といえます。

例えば、他市からの視察や研修、テレビ取材などの外的評価によって、市民が自分のまちを見直すということが増えました。

「バル後のまちの内的変化」

「内的変化」として、数値目標の結果があります。2008年の7月に認定を受けた「伊丹市中心市街地活性化基本計画」では、2008年に数値目標を掲げ、終了した2013年3月末に結果がでました。

①目標1 暮らしやすく、集い学べる郷町(まち)なか

<目標指数> 文化施設入場者数 600,600人 → 909,896人

②目標2 歩いて楽しい郷町(まち)なか

<目標指数> 休日の通行量 32,440人 → 40,926人



まちなかのお店の方々

写真前列中央が筆者、その後ろが伊丹市長

③目標3 活気あふれる郷町(まち)なか

<目標指数> まちづくりサポーター数 60人 → 472人

以上を見ると、施設入場者数や通行量、サポーター数が劇的に伸びています。

内的変化で特筆すべきは、イベントに関わるサポーターの数の変化です。なぜならイベントにはサポーターが不可欠だからです。上記のように、伊丹市調査では、イベントを主催したりサポートしたりする「まちづくりサポーター制度登録者数」が、8倍に増えました。イベント数がかかなり増えた今ではもっと数が伸びていると実感しています。

そして市民アンケートでは回答者の7割がイベントなどで中心市街地に来たことがあると答え、イベントにより、まちに関わる人の数が増えているのがわかります。実際に歩行者の通行量調査の結果にもあらわれています。

また、2013年の市民意識調査では、伊丹市は住みやすいまちだと思う83.7%、今後も伊丹市に住み続けたい83.3%と、確実にシビックプライドが醸成されています。

実際に私も、まちに関わることで、今まで何の興味もなかった伊丹のまちのことを、もっと知りたいと思う気持ちが強くなりました。今ではこの伊丹のまちが好きになりました。そして、その思いを人と共有したいという気持ちが育ってきました。いつしか、伊丹を好きになる人がもっと増えてほしい、伊丹に越してくる人がもっと増えてほしいと願うようになりました。住んでいるまちを好きになることが、どれだけ人生を豊かにしてくれるのかを身をもって知ったからです。これからも無理なく継続してまちに関わりながら、まちのみんなと楽しみながら、「まち活」をしていきたいと思っています。そしてその活動を通して、伊丹以外の色々なまちの人たちとも、つながっていきたくて願っています。

■筆者略歴

結婚して伊丹に移り住み、伊丹の町や歴史、まちなかのイベントに全く興味を持たなかった専業主婦が、8年前に参加したまち歩きイベントをきっかけに突然町に出てきました。コンサートの企画運営を行い、伊丹まちなかバルの運営に関わり(店集めやバルインタビューで市民と飲食店をつなぐ等)、商店街を舞台にした伊丹まちなか映像祭を行い、空き店舗で市民の活動拠点を作り、新設の図書館では官民一体の事業を展開しています。NPO法人いたみタウンセンターの理事になってからは、様々なイベントを企画、運営、サポーターの取り込みや情報発信も行い、「市民の参画と協働」や「バル」をテーマにした講演の機会も増え、今ではまちづくりにどっぷりとハマっています。2013年5月、理事長に就任。2016年4月、新しいまちづくり会社となった伊丹都市開発株式会社と事業統合、参与に。

(大阪市立大学大学院創造都市研究科在学中)

発行元・問合せ先 公益財団法人都市活力研究所
〒530-0011 大阪市北区大深町3番1号
グランフロント大阪 ナレッジキャピタル タワーC 7F
TEL 06-6359-1322/FAX 06-6359-1329